

〈書評〉

ホセ・カルロス・マリアテギ著
原田金一郎訳 『ペルーの現実解釈の
ための七試論』 (柘植書房, 1988年)

評者：真鍋周三 (同志社大学)

I はじめに

本書は、「ラテンアメリカ最初のマルクス主義者」であり、「今世紀ペルーが生んだ最大の思想家の一人である」ホセ・カルロス・マリアテギ (José Carlos Mariátegui, 1894-1930) の名著 (1928年刊) の邦訳書である。マリアテギは、原住民共同体の「社会主義的な実践的要素の残存」(40頁)に着目し、原住民系ペルー人民の主体的精神を重視しつつペルーの社会経済的変革の道を考察した。

まずマリアテギは、「ペルーのコスタ農業の〈植民地的性格〉」において、外資主導による世界市場むけの生産及びその結果としての食糧作物の生産低下とその輸入への依存の高まりなど、英米資本への従属関係に規定されたペルーの植民地的従属的資本主義としての特徴を鋭く指摘する(75-77頁)。それゆえに訳者は、著者を「原型的従属論者の一人」(393頁)と評価している。ペルーの現実をインカや植民地時代の歴史的源泉から説きおこした本書は、ラテンアメリカのみならず、今世紀初頭の中国や帝政ロシアなど、洋の東西を問わず考察の輪を広げており、第三世界全般に関心を寄せる読者をも啓発する書物であるといえるであろう。

著者が生きた時代のペルーには多くの問題が山積していた。第一次世界大戦中、先進資本主義国との結びつきが弱まったことにより、ペルーにお

いてもある程度の製造工業が発達した。しかし大戦後になると帝国主義、特に米国資本の大量流入によりペルーの自立的な資本主義経済の発展は挫折し、レギア政府(1919-30年)の下で従属的性格をさらに深めることになる¹⁾。著者の思想を理解するうえでエポックとなっているのが、1923年と1927-28年のいわゆる戦間期である。1923年は政府による「キリストの心へのペルーの奉獻」儀式挙行への反対運動を契機とするアヤ・デ・ラ・トーレの逮捕・流刑・国外追放にみられるとおり、レギア政府の急激な反動化と、その独裁的傾向が強まった年であった。同年に著者はヨーロッパ滞在(1919-23年)を終えて帰国する。1927-28年には、ペルーの社会変革をめざす運動が社会主義(マリアテギ)とアプラ主義(アヤ・デ・ラ・トーレ)に分岐した。両者の主張の骨子はほぼ次のとおりである。

マリアテギの思想は、マルクス主義とペルーの原住民共同体の共産主義的伝統に注目し、民族解放と国内階級闘争を結合した社会主義革命論であり、大衆文化の創造による統合的ペルーを社会主義革命により実現しようとするものであった。他方、アヤ・デ・ラ・トーレの立場は発展段階論をふまえ、帝国主義の浸透・抑圧下で固有の発展を阻害されたペルーの資本主義発展への政治的経済的ヘゲモニーの奪還を意図する経済ナショナリズムの思想であった²⁾。

「原著序文」において著者は、上記のみずからの姿勢について次のように述べている。「これらの試論はすべて、ペルーの諸問題と歴史についての社会主義的視座からの批判に貢献するもの」であり、「ペルーにおける社会主義の創造のために……つくす」(4頁)と。

以下では本書の概要を、ペルーの原住民問題への評者の関心に基づいて示し、次に評者が理解しうる範囲内でいくつかの問題点を述べることにとどめたい。

II 本書の構成

本書は、次のような構成からなっている。

原著序文

第I試論 ペルーの経済的進化の概要

第II試論 インディオ問題

第III試論 土地問題

第IV試論 公教育の過程

第V試論 宗教的要因

第VI試論 地方主義と中央主義

第VII試論 文学の過程

原注

訳注

訳者あとがき

文献目録

スペース的には第VII試論に本書のおよそ半分があてられている。以下、各試論の要点をみていこう。

第I試論では、後発ペルー経済の進展が述べられている。スペイン人の征服によるインカ経済の破壊後成立した植民地経済は、独立後の共和国期を通じて現在もなお残存している。グアノと硝石の採掘を軌軸とするペルー経済は、英国資本の支配下において資本主義と不当利得者としてのブルジョワジーを生み出した。太平洋戦争(1879-83年)の敗北によるグアノと硝石地帯の喪失は、ペルーにとって大きな打撃であった。だがグレース協定(1889年)を契機とする鉄道敷設権の譲渡によって英国資本への、またパナマ運河開通を契機に米国資本への従属によりつつ、戦後危機からの回復が進められていった。そして「今日のペルーにおいては三つの異なる経済要素」——「山岳部においては……封建的体制のもとで、原住民の共産制経済の残滓が」、沿岸部では「封建制の土壌のうえにブルジョワ的経済が」(18頁)存在するような複合社会が形成されるにいたったのである。

第II試論では、ペルーのインディオ問題の根源が社会経済問題、とりわけ土地問題(=土地所有形態)にあるという告発を行なっている。すなわ

ち、ラティフンディオの増加によって「原住民の共同体所有、あるいは個人の土地の大部分が収奪されてしまっている」(28頁)。したがって「インディオ問題」は、行政・法律・人種・道徳・宗教・教育上の「保護」の問題なのではない。原住民問題を歴史的に検討してみると、「インディオ問題の解決は、社会的解決でなければならず、「その実行者はインディオ自身でなければならない」(35頁)と結論づけている。

第III試論では、インディオ問題＝経済問題の角度からペルーにおける低開発の現状が、植民地期から歴史的・構造的に説かれている。独立革命(共和国樹立、1821年)以降もペルーでは、主に旧地主からなる封建的な支配階層がその地位を維持してきた。よって農地解放政策は功を奏さず、共同体に打撃を与え(55頁)、ラティフンディオが強化・拡大された。ペルーの農地問題は封建制度(ラティフンディオと隷農制)の廃棄の問題である。だがその解決は、自由主義的方式によってではなく、社会主義への道を通じてなされねばならない(その理由は、60頁、63-65頁)と展望する。

第IV試論では、「ペルーにおける公教育の過程の基本的な思想的政治的軌跡」(126頁)を検討し、〈新しい世代〉の出現を告知する。共和国の公教育はスペイン植民地期(副王体制＝封建的貴族体制)の遺産をベースにフランス、米国の影響下に形成されてきたため、「原住民要素の存在を無視するという根本的欠陥」(93頁)が生じた。ところが、1918年のコルドバの大学改革に端を発した学生運動は、ペルーにおいても〈新しい世代〉を輩出した。彼らは「現行の社会経済体制の弊害と欠陥」(99頁)を直視して、「プロレタリアートと……連帯し、前衛的社会思想の普及」(102頁)に着手した。したがって、ペルーにおける大学改革そのものは1923年以降保守的寡頭支配勢力による反動にあい、クスコ大学を除くとほとんど進展せず停滞してしまったにもかかわらず、その歴史的意義は否定できないのである。

第V試論では、スペイン・カトリシズムのもつ保守性にメスを入れている。「インカの宗教は社会・政治体制と一体化して」(132頁)おり、原住民の心情や習慣を侵害するものではなかった。これに対してスペインの「征

服は……十字軍であり……兵士と宣教師の共同事業として実施され」(137頁)、植民地時代における文明化(教育と文化)は、インカの神々にとってかわったカトリックの教権の事業によったとする。「反僧族主義を欠いては成立しえなかった」(152頁)フランス革命とは異なり、ペルーでは独立革命後も依然として「半封建的なカトリック国家」(155頁)として、宗教分野においてもスペインの政策が踏襲されたと言明する。

第VI試論。連邦主義や中央集権主義をめぐる論争は、すでに超克された時代錯誤的なものである。連邦主義は封建制に根ざしはぐくまれたもので、ガモナルの復権として登場しているにすぎない。新しい世代の関心事は経済構造である。地方主義的感情は、沿岸部のスペイン的ペルーと山岳部の原住民的ペルーの抗争(170頁)によって培われている。地方分権化の現実的プログラムは、ガモナルを強化するような改革ではなく、ペルーの歴史的現実をみすえ、民衆(インディオ)の必要性と方向性を体現することではなければならない。新しい地方主義者は原住民復権論者であり、彼らにとって第一の問題はインディオ問題であり、土地問題なのである(178頁)。

第VII試論では、ペルー文学の現状の解釈が試みられている。最初に、著者の立場(「植民地主義者の隠蔽された姿勢にたいし……革命的・社会主義的姿勢を対比させる」192頁)が述べられる。征服・植民地期を経たペルーの民族文学は、土着的(インカの)・スペイン的(植民地的)二重性を有している。共和国期に入っても植民地主義的文学は生きのびており、新生ペルーは五里霧中にある。独立革命後創出された共和国の機構が植民地期の社会経済体制と本質的にかわらなかったためである。このスペイン的・植民地的なものを告発し、それからの脱却をはかり、大衆(インディオ)の側に立ってペルー文学の可能性に価値と光を与えたのはゴンサレス・ブラダであった。ところで、原住民の感情や地方を理解した文学は、他にも早くから現われていた。メルガルの民衆詩(ヤラビー)やガマラの作品である。とはいえ、ブラダ、メルガルらの急進主義は、リバ・アグエロ、ハビエル・プラド、ガルシア・カルデロンら〈未来派〉の保守的実証主義(=

副王時代への懐古主義)により、その影響を弱められた。

しかしこの未来派の保守性は、バルデロマル、スレン、イダルゴ、バリエホ、ギリエン、マグダ・ポルタルらによって乗り越えられてゆく。『コロニダ』誌(1916年1～5月)を主催したバルデロマルは、「ペルー文学に世界主義の要素をとり入れ……インカ主義」(244頁)にひかれ、文学上・文化上の革新的運動を生み出した。スレンは保守的で伝統的精神を嫌い、自らを「親原住民主義者」(252頁)と宣言。イダルゴは激しい個人主義によって革命的叙情詩を創作し、詩人バリエホは、原住民の感情を純粹かつ形而上学的・郷愁的に表現した。ギリエンの魂は「農民的な根」(294頁)を多くもっている。女流詩人マグダ・ポルタルは「真実」(267頁)の追求を自己に課している。

「ペルーにおける〈インディヘニスモ〉は……本質的に文学的現象なのではない」(307頁)。新生ペルーの精神や意識を体現した政治学・経済学・社会学における原住民問題と密接に関連しているのである。今日のペルーで大勢をしめるインディオは、復権によってペルー民族性の基礎とならねばならず、植民地期以来の封建制度の残滓は精算されねばならない。そして、「新しい世代は……植民地主義の決定的没落をつけている」(323頁)、と暫定的結論を下している。

「訳者あとがき」では、著者の人物像が紹介され、本書各論の初出や構成ならびに簡潔な要約がなされている。また「マリアテギ夫人インタビュー」は、クローチェとの関係、著者の人となりや日常生活、コミンテルンとの対立やその後の再評価等に関する鮮烈な証言となっている。「訳注」も豊富で、「文民派」、「ガモナル」、「ヤナコナ」といった難解な用語も理解できるよう配慮されている。

III 本書が含む若干の問題点

本書は「系統だった書物ではない」(3頁)し「完結していない」(4頁)と著者は序文でことわっている。本書は「現実解釈」論であり、「解釈」そ

のものに力点がおかれている。ところが、「解釈」の対象である「現実」の説明において曖昧な点がみられるように評者にはみうけられる。

(1) まず、「山岳部」(以下、「シエラ」と略称)の範囲が明確ではない。資本主義経済創造の前提である労働力の供給源として、特にシエラ南部の原住民が想起される。太平洋戦争以降、シエラ南部への鉄道路線の延長に伴ない、その沿線にラティフンディオが増加した。それは共同体所有地の収奪と原住民層の分解を意味していた。原住民の多くが①ラティフンディオのペオンに転化したり、②リマなど沿岸部(以下、「コスタ」と略称)に流れてプロレタリア化した(①、②と類型化したがる、双方間に重複が生じることは免れない)。

ペルー南部のモケグアに生まれ、バルカルセルと交流の深かった著者にとって、「シエラ」とはほぼ「シエラ南部」をさしているのではなからうか。例えば次のような描写がある。

「クスコ、アレキパ、プノおよびアブリマックの諸県……は、ペルーの地方のなかでもっともその区分が明瞭で有機性をもっている。これらの県のあいだでは、交易と紐帯によってインカ文明期からひきつがれた旧来の統一性が強力に維持されている」(171頁)。

とはいえ、本書の各所に散見される「シエラ」が「シエラ南部」をさしているのか、あるいは地勢学的にシエラ全体(169頁)をさすのかは、定かでない。

このことは、「シエラ」の原住民層の分解(=共同体の破壊)(60-61頁)状況を考える場合にも関連する。前掲の第II試論・28頁の説明は、その潰滅の状態を伝えている。「シエラにおいて……土地の支配権はガモナルの手におちており、原住民人種の運命は極端な没落と無知の底に沈んでいる」(34頁)。

だが別の箇所では、「一般にシエラのラティフンディオの作物は共同体とおなじである。そして生産量にも差異はない……南部諸県における土地抗争は暴力と虐殺によって原住民所有者から強奪するところまできており、

その結果、生産の最良地は地主の手に移っている」(67頁)とも述べている。

このように著者の言及は抽象的で不明瞭であるため、原住民層の分解や共同体破壊の状況が具体的にはわからない。当然ながら、①及び②に流れた原住民の人口的規模を知ることもできない。

(2) また、第II試論のカギである「ラティフンディオ」の実態も不明である。その起源は植民地体制までさかのぼり(61頁)、共和国の時代に定着・拡大した(59頁)とか、原住民がそれに緊縛されている(69-70頁)といった指摘はあるが、その分析は皆無である。地理的・歴史的見地から当時のラティフンディオは、大きく二種類に分けられよう。つまりコスタのラティフンディオとシエラ南部に特有のものである。前者は、世界市場むけに綿花や砂糖(20-22頁)の生産を、後者は、羊毛(80頁)や国内消費費用農産物(19頁)の生産を主にめざしたと考えられる。そこで評者がもっとも知りたい点は、コスタとシエラ双方におけるラティフンディオの分布状態や規模、そこに繋がれていた原住民の人口的規模などであるが、これらについても全く不明である。

(3) つぎに、「共和国はインディオを貧窮化し、その没落を深化させ、悲惨をつのらせた。インディオにとって共和国は、自分たちの土地を体系的に収奪する新しい支配階級の登場を意味した」(33頁)とあるが、そもそも本書では、原住民がいかなる必然性によって搾取・収奪されるに至ったのか、その具体的なメカニズムが十分に説明されていない。換言するならば、搾取・収奪が帝国主義(=英米外国資本)の側からの規定であったとしても、それを内側から再規定している国内的条件が示されていないのである。原住民が貧窮化し土地を手離さざるを得なかった背景には、内側からいかなる圧力が働いていたのか、この点が皆目わからない。

このことは著者の思想の核心、つまり現代社会主義(③リマの工業プロレタリアートに代表される、211頁参照)とインディヘニスモ(④シエラの原住民農村大衆に代表される)の結合により、新生ペルーの建設をめざすとの主張をも抽象論の殻に閉じ込めてしまっている。新生ペルーの「歴史

的基礎は原住民でなければならない」(212頁),「インディオが民族性の基礎とならねばならない」(307頁),「インディオの復権……がペルー革命の計画のうちにかびあがってくる」(311頁)などと述べても,③及び④の各人口的規模についての説明もなく,こうした主張は具体性を欠いている。

また,④の状況に関して著者は次の如く述べている。「インディオが四世紀間ほとんど精神的変化がなかったという仮定は,無謀なものではない……心の奥底はほとんどかわることがなかった」(311-312頁)。「山岳部のインディオは……いぜんとして固有の伝統のもとに行動している。〈アイユ〉共同体は,環境と種族にしっかりと定着している一つの社会的形態である」(319頁)と。

ここで評者は,次のような原住民の歴史の断片を想起せずにはいられない。

(a) スペイン征服直後の16世紀でさえ,ポトシ市場経済への従属下におかれた原住民共同体の変容は著しいものであった。たとえば,共同体員の間に貧富の差が拡大する一方で,主としてミタ制(賦役)の影響により膨大な規模の原住民が共同体を離れ,浮浪民と化していった。

(b) 18世紀になると,共同体の破壊はいちだんと進んでいた。たとえば,1754年のペルー副王領では原住民成年男子人口の約35%がフォラステロ(forastero,共同体を離脱した原住民)となっていた。特にクスコ司教区等のシエラ南部でその高い割合が記録されている³⁾。

(c) トゥパック・アマルの反乱(1780-81年)の際,最初から王党派に味方して反乱軍と戦った原住民勢力があった。さらに反乱軍鎮圧のために1781年3月にクスコで組織された討伐軍約1万3000人の大半もまた原住民であった。

つまり,植民地期を通じて共同体や原住民の状況が著しい変化を遂げた点をも考慮する必要が感じられるのである。

(4) さらに,「インカの国家機構が共産主義的機構であった」とか「インディオの共産主義」(313頁)といった「共産主義」への言及が散見される

(その他, 42 頁, 49-50 頁, 65 頁参照) が, その実態も本書では不明である。ただ, インカ皇帝と地方の共同体が一枚岩的に結合していたとはいえない。たとえば, 15 世紀におけるティティカカ湖岸のコヤオとルパカ両地方の覇権争い(インカ皇帝パチャクティをも巻き込む)は周知のもののほか, タワンティンスーユに編入された後も両地方は, インカに対して数回にわたり反乱を起こしたことが知られているのである。

以上からして, 先駆的著書であるがゆえに無理からぬことであるが, 本書ではペルー革命の主体である原住民の状況についての分析がまだまだ不十分であるといわざるをえない。むしろ, 以上の指摘は, 植民地期のペルー史を専攻する評者の立場からの「ないものねだり」的な評価であることもおことわりしておく。

ともかく本書で扱われている問題枠がきわめて広範なうえに, 著者の先駆的思想には深遠なものがあり, 検討の価値は大いにある。本書の出版が契機となってマリアテギの思想が一人でも多くの人々に伝えられ, ラテンアメリカのみならず第三世界の諸問題や歴史研究の「道しるべ」として貢献することを期待したい。

注

- 1) 小倉英敬「1920年代ペルーにおけるインディヘニスモと〈新しい世代〉——シエラ南部の資本主義化とナショナリズム——」(青山学院大学修士論文, 1978年度), 27-28頁。
- 2) 同上, 92頁, 94頁。
- 3) Jürgen Golte: *Repartos y rebeliones, Túpac Amaru y las contradicciones de la economía colonial* (Lima: IEP, 1980), pp. 54-55.